

山本茂実『あゝ野麦峠、ある製糸工女哀史』（角川書店・角川文庫、）42頁。

明治42年11月20日午後2時、野麦峠の頂上で一人の飛騨の工女が息を引きとった。名は政井みね、二十歳、信州平野村山一林組の工女である。またその病女を背板にのせて峠の上までかつぎ上げて来た男は、岐阜県吉城郡河合村角川の政井辰次郎（31）、死んだ工女の兄であった。

角川といえば高山からまだ七、八里（約30キロ）、奥越中（富山）との国境に近い、宮川沿いの小さな部落である。ここから岡谷まで七つの峠と30数里の険しい山道を、辰次郎は宿にも泊らず夜も休みなしに歩き通して、たった2日で岡谷の山一林組工場にたどりついた。



「ミネビョウキスグヒキトレ」という工場からの電報を受取ったからである。

辰次郎は病室へ入ったとたん、はっとして立ちすくんだ。美人と騒がれ、百円工女ともてはやされた妹みねの面影はすでにどこにもなかった。やつれはててみるかげもなく、

どうしてこんな体で十日前まで働けたのか信じられないほどだった。病名は腹膜炎、重態であった。工場では辰次郎を事務所に呼んで十円札一枚を握らせると、早くここを連れだしてくれとせきたてた。工場内から死人を出したくないからである。辰次郎はむっとして何かいいかけたが、さっき言ったみねの言葉を思い出してじっとこらえて引きさがった。

「兄さ、何も言ってくれるな」

みねはそう言って合掌した。飛騨へ帰って静かに死にたがっているのだと辰次郎はすぐ察した。みねはそういう女だった。準備して来た背板に板を打ちつけ座ぶとんを敷き、その上に妹を後ろ向きに坐らせ、ひもで体を結えて工場からしよい出した。作業中で仲間の見送りもなく、ひっそりと裏門から出た。辰次郎は悲しさ、くやしさに声をあげて泣き叫びたい気持ちをじっとこらえて、ただ下を向いて歩いた。しかし、みねは後ろ向きに負われたままの姿で、工場のほうに合掌していた。その時、

「おお 帰るのか、しっかりしていけよ、元気になってまたこいよ」

あとを追ってきた門番のじいさんが一人だけ泣いて見送ってくれた。

「おじさん、お世話になりました」

「元気になってまた来いよ、心しっかりもってな」

二人はお互いに見えなくなるまで合掌していた。辰次郎はこの門番の言葉にやっと救われた思いで歩き始めた。それはこの岡谷に来て初めて聞く人間らしい言葉だったからである。彼は、松本の病院へ入院させるつもりで駅前の飛騨屋旅館に一泊した。この旅館の経営者中谷初太郎は辰次郎たちと同郷の河合村角川出身者で、その彼も一緒になって、みねに入院することを勧めたが、飛騨へ帰るというみねの気持は変らなかった

しかたなし辰次郎はまたそこもしょい出して、いよいよ野麦街道を新村、波田、赤松、島々、稲核、奈川渡、黒川渡、寄合渡、川浦と幾夜も重ねて、野麦峠の頂上にたどりついたのが11月20日の午後であった。

その間みねはほとんど何もたべず、峠にかかって苦しくなると、つぶやくように念仏をとなえていた。峠の茶屋に休んでそばがゆと甘酒を買ってやったが、みねはそれにも口をつけず、

「アー飛騨が見える、飛騨が見える」

と喜んでいたと思ったら、まもなく持っていたそばがゆの茶わんを落して、力なくそこにくずれた。

「みね、どうした、しっかりしろ」、辰次郎が驚いて抱きおこした時はすでにこと切れていた。

明治時代の生糸の輸出は、当時の輸出総額の3分の1に達していた。現金収入の少なかった飛騨の農家では、12歳そこそこの娘達が、野麦峠を越えて信州の製糸工場へ「糸ひき」として働きにでた。大みそかに持ち帰る糸ひきの金は、飛騨の人々にはなくてはならない大切な収入であった。借金を返すためのあてにされた金だったのである。

昭和恐慌とあいつぐ凶作で被害を受けた村の実態を「凶作地帯をゆく」（昭和9（1934）年10月26日付け秋田魁新聞）と題する現地レポートには次のように記されている。



「秋晴れの鳥海は清らかな山姿を、紺碧の空にクッキリ浮かせている。しかし、山裾にある町村は、未曾有の凶作に悩み、木の実・草の根、人間の食べられるものは全部刈り取り掘り尽くし、米の一粒だに咽喉を通すことのできぬ飢餓地獄にのたうつ惨状、秋田県由利郡直根村百宅部落のごときは、空飛ぶ鳥類さえ斃死したかと思われ、400名の部落民からは生色がほとんど奪われ、天に号泣し地に哀訴の術も空しく飢え迫る日を待つ

みの状態である。同部落は戸数 100 戸、作付け反別 80 町歩、これは冷害のためほとんど全



滅だ。同分教場には 90 名の児童を収容しているが、欠食児童は 3 割に当たる 30 名、欠席者は非常に多く、1 日平均 20 名、また早引きするものもかなり多い。これは家人の働きに出た後の留守居や、でなければ山に入って栗・トチ・山ぶどうなどの木の実、山ゆり・山ごぼう・フキなどの草の根・木の葉を集めるために欠席する。糧食なくして何の教育ぞやの感を深くさせられる。垢に汚れたヨレヨレのボロ着にまとった赤児をおんぶして、授業を受ける児童の多いこと、一人泣き出せば又一人、背の赤児はまだしも自分でもママ末に負えなくなって泣き叫ぶ子守りもいる。こうした名目ばかりの義務教育を終えて、やっと 15,6 になると、雀の涙ほどの前借金で丁稚とか酌婦に売り出される。生まれ落ちて布団もろくろくしないワラの中に育ち、食うや食わずにやっ

と 6 年を終えたら、知らぬ他国に涙の生活、彼ら山間奥地の住民は、永劫に光を持たぬ運命を約束されてきた。」

売られゆく娘たち凶作が決定的となった 1938 (昭和 9) 年、県保安課がまとめた娘の身売りの実態によると「父母を兄弟を飢餓線より救うべく、悲しい犠牲となって他国に嫁ぐ悲しき彼女たち」の数は、1 万 1182 人、前年の 4417 人に比べて実に 2.7 倍にも増加している。身売り娘が多かったのは、秋田の米どころと言われる雄勝・平鹿・仙北三郡であった。娘の身売りは人道問題として社会的関心を呼び、身売り防止のポスターが作られ、防止が呼びかけられたが、小作農民の貧困の根本的解決がない限り、娘の身売りの根絶は困難であった。

この困窮はたしかに直接の原因は「冷害」による「凶作」であるが、元凶は第 1 次大戦後恐慌後、輸出急落による繭価下落からはじまる養蚕・織物・製糸・紡績破綻による農村危機である。しかしこの無残な農村の現実をよそに、1920 年代震災復興の都市改造によって、「帝都」に建造される帝国ホテル (1922 年)・丸ビル (1923 年) などの高層ビル、松竹キネマ (1920 年)・東宝 (1923 年) などの映画会社の設立、ラジオ放送開始 (1925 年) を見た「モボ・モガ」とよばれた「都市のモダニストたちは、大震災から復興の進んだ 1920 年代末の末には、自分たちがアメリカやヨーロッパの人々と同じ生活をしていると感じていた。」寺出道雄『山田盛太郎、マルクス主義者の知られざる世界』(日本経済評論社、2008 年) 128 頁。